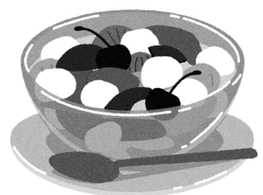
変わる日本の「暮らし」と「まち」

高校生がおもてなし 心温まる世代間交流サロン

ひだまりサロン（コンフォール若葉）
ウェルフェア事業
（2017年●平成29年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe



illustration：Shigeyuki Sakata

「いらっしゃーい！」

「お久しぶり、お元気でしたか？」

真新しく改修された集会所に、明るい声が響き渡る。次々と現れる訪問者を笑顔で出迎えるのは、制服姿の高校生たちだ。

梅雨も終わりに近づいた7月20日。東武東上線若葉駅にほど近いコンフォール若葉で、筑波大学附属坂戸高等学校の生徒による「ひだまりサロン」が開かれた。月に1回、第三土曜日に開かれるこのサロン、高校生が講師役になってお菓子作りや工作、ゲームなどさまざまなイベントを企画・運営。コンフォール若葉などの団地や近隣に住む方々とふれあう場として、既に5年以上続いているという。

当日は、90代を含む8名が参加。高校生とともに、ニックネームを書いた名札を下げて「もうすぐ夏休みが始まりますが、宿題が次々に出て、遊びたいけど大変」と高校生が話せば、「おばちゃんね、耳が遠くて、お話するときは大きい声でしゃべってくれると助かります」など、全員が自己紹介と近況報告。笑い声と拍手で、和やかに会が始まった。

参加者の笑顔と高校生の笑顔が実に清々しい集い

メニューは「理学療法士による体操と白玉フルーツポンチ作り」。ベテラン主婦の参加者が手早く白玉を丸める様子に、高校生が「めっちゃ、速い！」と歓声を上げるなど、和気あいあいだ。

鶴ヶ島ケアホームの理学療法士、田澤俊亮さんの指導で健康体操をした後は、おやつの時間だ。高校生たちは、ポツンと一人になっている人はいないか、足りないものはないかなど細やかに気を配りながら、てきぱきと動き回る。

手作りの白玉を食べながら、「私は女学校に入ってすぐ戦争が始まったから、軍需工場で徹夜で働かされて青春がなかったのよ」との参加者の話に、高校生が熱心に耳を傾けている。話題は尽きず、盛り上がったまま約2時間の会は終了。「楽しかった」「白玉、おいしかったよ」という参加者を、高校生たちが弾ける笑顔で見送った。

参加者みんなで楽しむサロン

「この『ひだまりサロン』は、高校の『福祉から見た生活』という授業で、地域社会の課題改善の一環として始まったと、先生から聞きました。それ以来、ボランティアの取り組みとして、また、一緒に作り上げていく姿勢が代々受け継がれています」と説明してくれたのは、代表を務める高校3年生のあーちゃんだ。将来の夢は看護師。地域に入って何かをすることで自分も成長したいと、2年生の4月から参加しているという。

「参加なさる方がどうすれば楽しんでくださるかを考えて企画を立てるんですけど、終わったときに『楽しかったよ』『ありがとう』って笑顔で言ってくれるのがすごくうれしくて、この活動の原動力になっています」

えみなちゃんは「ボランティアをやっているというより、自分たちがやりたいことを一緒に楽しんでいる感じです。ここに参加して、保育系だった進路を福祉系に変えました」と話す。

小学校の先生になりたい、というまりなちゃんは「先生になったとき、ここでの経験を活かして話ができれば、子どもたちも温かい目で高齢者の方を見ることができるかなと思います」。理学療法士を目指しているそらちゃんは「去年、人生ゲームをやったんですけど、ゲームをやりながら高齢者の方の人生をお聞きして、すごいなって。ボランティアをすることで、クラスメートと違うつながりができたのもうれしい」と話してくれた。

高校の総合学科で福祉を学んでいるという彼女たち。現在のメンバーは話を聞いた3年生4人と2年生8人の12人。全員が心から楽しんで参加しているのが、言葉から、そして満面の笑顔から伝わってくる。

「同じ高校で同じ福祉を学び、同じ価値観や考えを持っているからこそ、できるんじゃないかなと思っています」とのえみなちゃんの言葉に、全員が大きくうなずいた。

ミクストコミュニティの理想形

サロンに参加していた山﨑幸子さんは「来年80歳になりますが、周りの人とは挨拶程度しかしないし、ここの6階に住んで見晴しもいいから、外に出たくなくなっちゃって……これは怖いことだと思ってね。今は孫のような子たちとおしゃべりできて、第三土曜日がとても楽しみなの」と話す。

「ひだまりサロン」の活動をバックアップしているのは、鶴ヶ島市と鶴ヶ島市社会福祉協議会、コンフォール若葉を管理するUR都市機構だ。三者は協定を結び、URは鶴ヶ島市社会福祉協議会の認定団体に無償で場所を提供。「ひだまりサロン」にも、2017年からコンフォール若葉の集会所を提供している。

鶴ヶ島市社会福祉協議会の北堀尚美さんは「高校生らしい感性で新鮮な企画を考えてくれて、参加者も増えています。誰でも自由に参加できますし、『今までこういう接点がなかったから、夜眠れないくらい楽しかった』との高齢者の声もお聞きし、すごく意義があることだと思いました」と語る。

高校生たちを娘のように見守るUR埼玉エリア経営部の井村淳（あつし）は「URでは、少子高齢化対策の一環として各地でウェルフェアの取り組みを進めており、その一つの柱であるミクストコミュニティ形成のために、ここでは集会所使用のスキーム作り、地域を広く巻き込むコーディネートを行ってきました。理想とするのは、立ち上げのお手伝いをして、最終的には自立して地域に根付いていく形。ここでは高校生が主体になって自立している、まさに理想形です。人格形成が進む一番多感な時期に、こういう活動に取り組んでいる姿はすばらしいですね」と目を細める。

味見させていただいた白玉は、ふんわりと優しい味。参加した人誰もが優しく温かな気持ちになれる、すてきなサロンだ。

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社